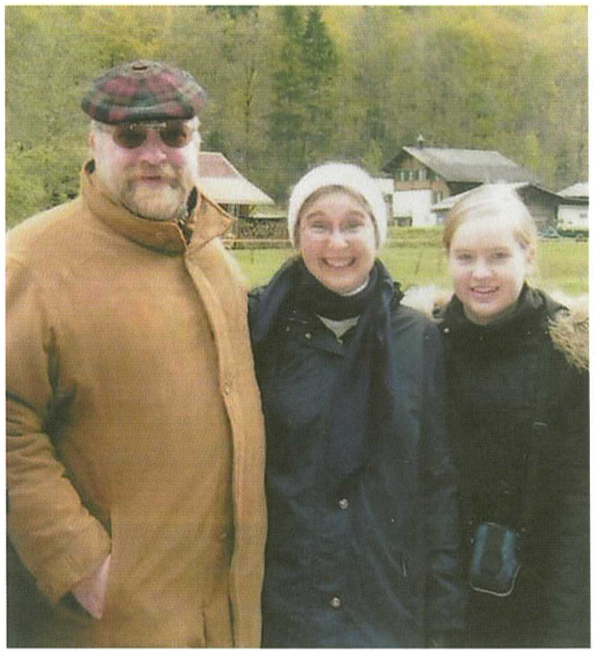
ゴットホルド・ベック兄弟はゴールインされた

アンドレアス・プレッチ

ドイツ全国の集会用冊子「集会便り」に掲載された追悼文



左からプレッチさん、妻のコーネリアさん、娘のアンドレアさん

ドイツ全国の集会で共通に読まれている「集会便り」という小冊子にアンドレアス・プレッチ兄がベック兄の追悼文を寄稿されました。同時に、「敬愛する日本の兄弟姉妹の皆様へ」と題する挨拶文を添えて、追悼文をキリスト集会に送ってきてくださいましたので、以下、その翻訳を掲載します。

敬愛する日本の兄弟姉妹の皆様へ

私たちは、主に在って一つです。そして、これからも一つであり続けます。

私たちが神の子どもと呼ばれるために、――事実、いま私たちは神の子どもです。――御父はどんなにすばらしい愛を与えてくださったことでしょう。世が私たちを知らないのは、御父を知らないからです。

愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。

（1ヨハネ　3・1～2）

主イエス様がベック兄を通して日本で始められたみわざが、これから先も引き継がれて、主のご栄光があらわされますように、ドイツに於いて祈っています。

アンドレアス&コーネリア プレッチ

「キリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。」ピリピ3章12節に記されているこの使徒パウロの信仰告白は、ゴットホルド・ベック兄の人生にも貫かれていました。ベック兄をよく知る人々は、彼が「キリストに捕えられた」兄弟だと体験的に知っていました。

ベック兄は一九三〇年三月二十五日に生まれ、信仰

ゴットホルド・ベック兄弟はゴールインされた

者の両親の下で成長し、回心後は宣教師として主イエス様に仕えることを最大の願いとしていました。ベアーテンベルグ神学校で基礎教育を修了され、卒業後は宣教活動の中でイエス様が直接の養育係となってくださいました。ベック兄本人は日本にも大都会にも行きたいとは望んでいなかったそうですが、一九五三年、リーベンツェラー伝道会から日本へ単身で派遣され、一九五五年十二月八日にミンヘン姉妹と結婚、この時から日本で共に主イエス様に仕えることになりました。

その後、ベック兄は教会のあり方についての考えの違いから伝道会を離れ、独（ひと）りで、主イエス様だけに頼りながら伝道活動を続けました。このことが彼と家族にとって、どれほど大変な道のりであったか、私たちには想像すらできませんが、主なる神はつねに彼に誠実を尽くし続けてくださいました。個人的な交わり、家庭集会、喜びの集いなどを通して、神の

みことばは伝えられていきました。当時のベック兄からの報告には「現代でも神が奇跡を起こして人間に新しいいのちを与えてくださる」とありました。六十三年間の奉仕を通して、新約聖書に記された模範に習う集会が、四十二箇所で建て上げられました。

その一方で信仰の試練から免れることもありませんでした。娘のクリステルは生後短期間で召され、一九八〇年には娘のリントラウト（リンデ）が二十歳で癌を患いました。リンデの召天は、ベック兄姉の伝道活動に深い影響を及ぼす体験となり、病気と死を直視したリンデの証しは、日本だけではなく多くの国の人々に信仰を促し、イエス・キリストへの一層強い献身を薦めることになりました。一九八六年には娘のウルスラも自動車事故で召されています。

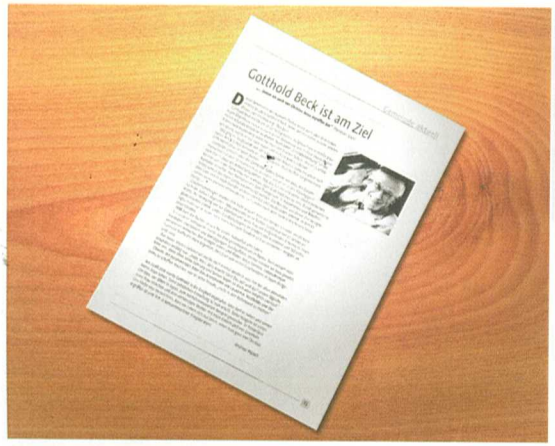
伝道活動の一大ハイライトは、長野県御代田に福音センターが建設されたことです。そこでは数々の喜びの集い、結婚式、葬儀、納骨記念会などが行われ、唯一の救い主イエス・キリストを紹介する場として用いられています。ベック兄が始められたこれらのことは、現在、日本の多くの兄弟姉妹たちに受け継がれています。ベック兄がドイツに送り続けた祈りのメールの最終号には、ベック兄にとって伝道活動に最も大切なことが、改めて次のように明記されていました。

「『主よ、お語りください。しもべは聞いております。』これが日々、われわれの願いであるべきであって、主の導きと祝福がなければすべては空虚なものとなる」と。

歳を重ねるに連れて、白血病、皮膚癌、糖尿病などの病が与えられましたが、定年退職がないことは、ベック兄にとって喜びでありました。

二〇一六年八月二十三日、ゴットホルド・ベック兄は永遠へと召され、今は主イエス様にお会いし、みもとで安らかに憩うことが許されています。兄弟が待ち望んでいたことが、ついに叶えられたのです。

ゴットホルド・ベック兄弟はゴールインされた



彼の徹底した献身振りは、多くのキリスト者、とりわけ日本のキリスト者にとっての模範となっています。ご遺族は妻のミンヘン姉妹、三人の既婚の娘さん、九人の孫、四人のひ孫たちです。我々に残されたベック兄の遺言は、「我々がキリストに完全に捕えられて、妥協なき献身を以て主に仕えること、それだけが人生に意味をもたらすものなのだ」ということです。

（筆者紹介）

アンドレアス・プレッチ兄は、ドイツ北部のオスターホルツ・シャームベック在住で、少年時代にはベック兄の日曜学校の生徒でした。妻のコーネリア姉妹、娘のアンドレア姉妹の三人家族で、オスターホルツ・シャームベック集会に集われています。吉祥寺キリスト集会のドイツ喜びの集いにもよく参加しておられました。日本にもご夫妻で来られたことがあります。

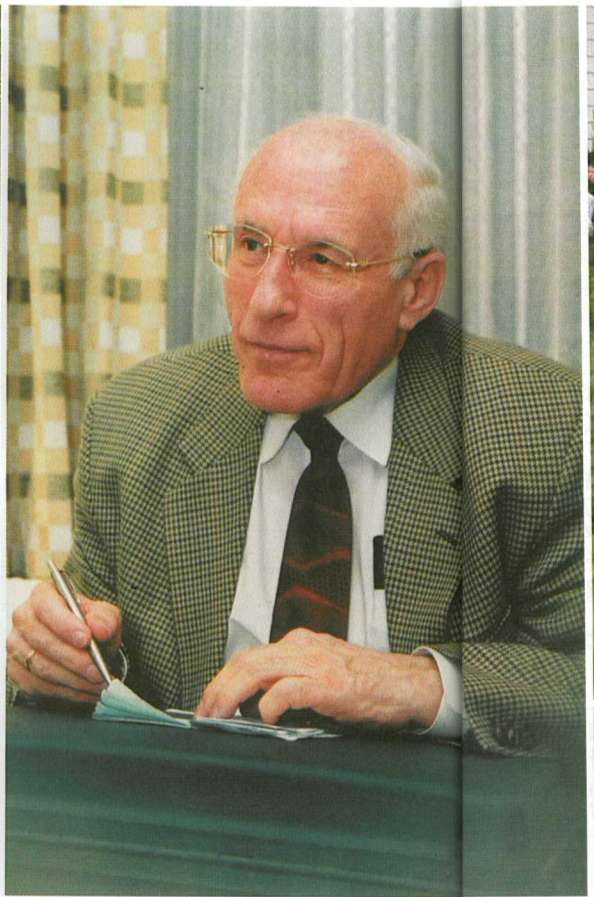
アンドレアス兄の父上、故エーヴァルト・プレッチ兄は、ベック兄姉と長年の信仰の友で、吉祥寺キリスト集会のことをいつも祈っていてくださったメットマン集会の兄弟でした。エーヴァルト兄は日本にも数回来られたことがあり、集会の兄姉とも交わりをもたれました。


中央がお父上のエーヴァルト・プレッチ兄


Evangeliumszentrum

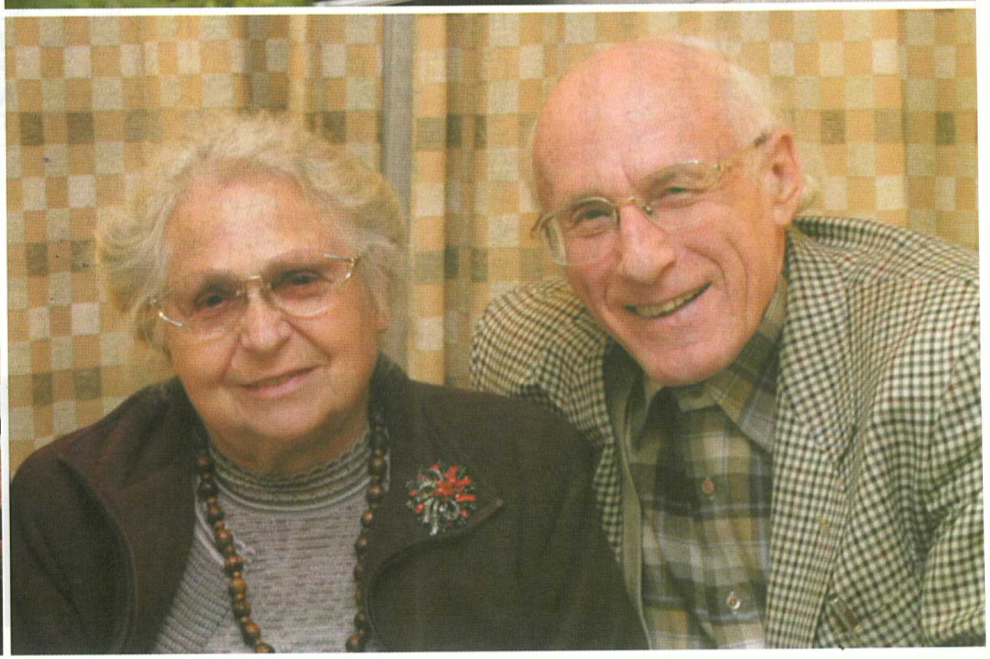






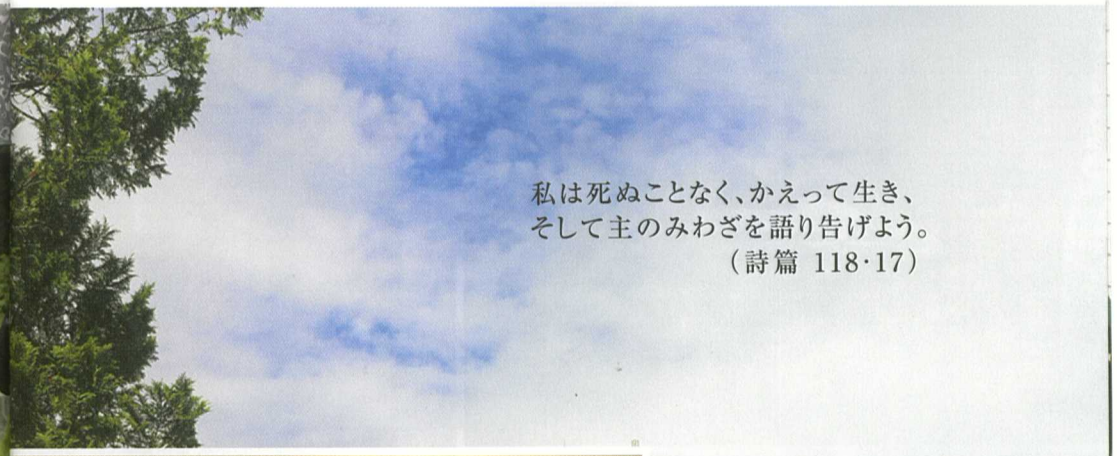



長野830
11-94



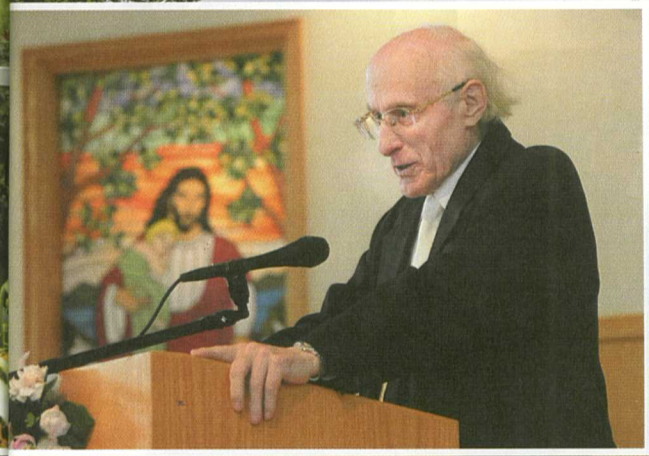






私は死ぬことなく、かえって生き、
そして主のみわざを語り告げよう。
（詩篇 118･17）











主の導きにあずかる日々

広橋　雄二



後列左から妻の真由美さん、雄二さん、ご友人と

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにおいて、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。（エペソ　1・3）

幼少期の礼拝

私は、一九五四年、長崎県佐世保市で父母、姉二人、兄一人、私の四人きょうだいの末っ子として生まれました。建築職人である父が家族の生活を支えてくれていました。長崎という土地がら、教会が多く、私はカトリックの幼稚園に通いました。幼稚園に行くと必ず礼拝堂に入り、わけも分からないまま跪（ひざまず）いてお祈りをし、賛美歌を歌っていました。このころから、何となく神様のことを思うようになりました。

小・中・高校時代まで佐世保で過ごしました。兄が父の後を継いでくれたので、私は受験勉強をして東京に出ました。専門的な学校に行ってみたらと言う母の勧めもあり、デザイン関係の学校で学ぶことにしました。

東京での暮らしの中で

夏休みに、アルバイト先の所長さんの先輩の設計事務所を紹介をしていただき、採用試験を受けました。そして、その設計事務所に就職が決まりました。この頃は、神様のことには思いが行かず、自力で仕事に励んでいました。そのうち、建築士の免許を取得することができました。しかし、相変わらず自分本位な社会人生活を送る日々でした。

バイブルキャンプに参加して

話は戻りますが、学生時代そして社会人になって以来の友人がいます。当時、彼は静岡から上京して青山学院大学に通っていました。彼の友人の奥さんだった横浜集会の姉妹から、キリスト集会のバイブルキャンプが軽井沢で行われるので、行ってみないか、と誘われました。御代田の第一ゲストハウスがアメリカの大工さんの手によって建てられているとのことで興味もあり、避暑地の軽井沢ならドライブがてらに行ってみようと思いました。初めての軽井沢行きに、わくわくしながらも、聖書に基づく集会とは、どんなところだろうと緊張しました。

第一日目、横浜集会の姉妹が、吉祥寺の兄弟をはじめ、全国からキャンプに来られた兄弟姉妹を紹介してくださいました。兄弟姉妹は、不思議なほど笑顔で迎えてくださり、これは、実に崇高な集会だ、と感銘を受けました。その夜、食堂で多くの兄弟姉妹の輪の中に入れていただき、イエス様の話を聞きました。私の横には、村上兄弟が座っておられ、「広橋さんは、ベック兄と交わるべきだよ」と言われました。

そして、次の日の聖日礼拝の時、ベック兄との交わりの段取りをしてくださいました。後で、村上兄弟

は弁護士さんだと知って驚き、なるほどと思いました。

信仰の道へ

交わりで、ベック兄は神様のことを分かりやすく話してくださいました。その時は、まだ主の十字架の意味がはっきりとは分かりませんでした。ベック兄は、話の最後に、「雄二は、聖書を持っていますか」と言われました。「持っていません」と答えると、「キャンプの終わりに、聖書をプレゼントするね」との言葉をいただきました。しかし、バイブルキャンプの最中であり、全国から多くの兄弟姉妹や未信者が集まっていたので、私のことなど忘れられるだろうと思っておりました。それで、ベック兄に帰りの挨拶をすることなく帰ろうとした時、ベック兄から呼びとめられました。「ちょっと待ってね」と言われ聖書が渡されました。私は驚き、大変感激致しました。せっかくいただいた聖書なので、帰って読むことにしました。

受洗に至る

当時、神奈川県川崎市に住んでおりましたので、横浜集会にときどき集わせていただくようになりました。横浜集会には、年齢の近い兄弟姉妹も多く、私の救いを祈ってくださいました。そして、一九八六年、吉祥寺キリスト集会（旧会堂）にて受洗の証しをさせていただきました。

結婚に至る経過

結婚につきましても、多くの兄弟姉妹のご配慮をいただきました。当時、横浜集会に集っておられた兵藤兄弟より、一人の姉妹（井上真由美さん）を紹介されました。関東近辺の姉妹だとばかり思っておりましたのに、四国の姉妹と聞き驚きました。これも主の御心なのかなと思いました。四国（徳島）と横浜は遠いなあと思いましたが、祈ってから電話をしました。姉妹とは、初めて話すような気がしませんでした。

それもこれも、愛する横浜の兄弟、四国の兄姉の祈りによるお陰だと感謝しています。

しかし、結婚に至るまでには幾つかの難関がありました。ベック兄に相談したところ、「ご両親への挨拶は、独りで行かない方がいいよ」と言われました。そして、高知のキャンプに合わせて江藤兄弟と行くようにと、段取りしてくださいました。ご両親は、海の向こうには絶対娘は出さない、との思いだったのですが、皆さんの祈りに支えられて、江藤兄弟との交わりがとても良かったようでした。真由美姉妹のお母さんの心をも動かしてくださったイエス様の恵みに感謝しました。人の思いでは成し得ない御業でした。その年、一九九一年、長崎、徳島の親族を迎え、ベック兄の司式のもと吉祥寺キリスト集会で結婚式を挙げることができました。

結婚してから

結婚後、仕事は順調でした。ただし経済界はバブルが弾け、建築業界もそのあおりを受けて会社の経営状態が不振になりました。その時には、長男が与えられていましたので、姉妹と祈った末、空気が良い妻の故郷徳島に帰ることにしました。当時、私は建築設計の図面をほとんど毎日描いておりましたので、現場の事も覚えたいと思っておりました。その希望どおりの建築会社が徳島に備えられていました。引越しの時には、愛する横浜集会に集う兄弟姉妹と伯父・叔母に手伝いをいただきました。本当に感謝でした。

みことばによる慰め

徳島での新しい生活に入り、初めの十年ほどは順調でした。しかし、四国地方もバブルの影響が影を落とし、会社の経営が次第に厳しくなって、仕事を辞めなければならなくなりました。その時、みことばによって慰められました。

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。

（2コリント　8・9）

建築士の資格を持っていたので何とかなると思っておりましたが、住まいのある徳島県西部は、産業も乏しく、建築業界はそれぞれ縄張りがあり、なかなか入り込めない難しい所でした。建築以外にもいろいろな仕事に付きました。

主なるイエス様は、「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」（ヘブル　13・5）と言ってくださいます。

家族の救いを祈る日々

現在は、建築とは畑違いの仕事の明け暮れですが、主なるイエス様は、私たち家族のことを憐れんで導き続けてくださっています。主イエス様を信じ生かされている者として祈ることの大切さを思い、家族の救いを請い願っております。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

広橋雄二（ひろはし　ゆうじ）
一九五四年／長崎県生まれ
小・中・高／佐世保にて卒業
最終学歴／東京デザイナー学院卒業
東京　株式会社長谷川建築設計事務所
勤続23年
現在／徳島県美馬市社会福祉協議会勤務
妻・真由美（まゆみ）
長男・謙（けん）

聖さに惹かれて

広橋　真由美



後列左から夫の雄二さん、長男の謙さん、真由美さん、真由美さんのご両親と

（生いたち）

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放してくださるためでした。

（ヘブル　2・14～15）

私は、一九六二年、徳島県西部の山あいの町で祖父母、両親、兄、私の六人家族の中に生まれました。両親は共稼ぎで忙しく、半ば放任で自由に育てられたと思います。兄とよく喧嘩をする自我の強い子供でした。

小学生の頃、死んだら暗くて狭いお墓に入れられると思い、「死」に対して息が詰まりそうな恐怖を感じたのを覚えています。

（将来に対する不安）

ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。

（ローマ　6・12～13）

私は中学生の頃から、罪と汚れの中に生きていることに悩みを持つようになりました。自分の行為に対する責めと将来に対する不安から、暗い生活を送るようになっていました。

（聖書との出会い）

高校生の時、三浦綾子さん原作の塩狩峠という映画を観たのをきっかけに、高校の前の病院で開かれる高校生会で聖書のお話を聞く機会が月に一度与えられました。そのうち、誘われるまま教会に足を運びました。そこには、自分にはない聖さがあると思いました。その聖さに惹（ひ）かれ、上京したら教会に行ってみようと思いました。

（祈りが聞かれる）

祈りを聞かれる方よ。みもとにすべての肉なる者が参ります。

（詩篇　65・2）

大学に入学すると、東京の町田市でアパートを借り、そこから十五分ほどの教会に毎週通うようになりました。大学二年生の時、日曜日に英語検定を受けなければなりませんでした。それで、私は今回の試験で落ちたら、もう一度、礼拝を休んで試験を受けなければならない旨を神様に祈りました。結果は合格でした。神様が合格させてくださった、と思いました。

（吉祥寺キリスト集会との出会い）

神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。

（エペソ　1・5）

もっと神様のことを知りたいと思った私は、別の教会の特別伝道会やゴスペルコンサートなど機会を見つけては参加していました。

その頃、兵藤姉妹（旧姓小松川姉妹）と出会いました。アパートの隣の部屋の、体調が悪い先輩を夜昼となく訪問する姿に、自己犠牲の愛を感じました。軽井沢のバイブルキャンプにも参加させていただき、教会との違いに気がつきました。それは、集会の兄弟姉妹は聖書の言葉を百パーセント神様のみことばとして受け取っていること、兄弟姉妹のご家族が次々に救われているということでした。

家族の救いが、私には何より大事だったので、教会から集会に移ることを決心しました。吉祥寺キリスト集会の礼拝に初めて加えていただいた時、聖歌が歌われる中で、涙があふれて止まりませんでした。

こうして、一九八三年四月三日、吉祥寺キリスト集会で、ベックさんからバプテスマを授けていただきました。大学四年の時でした。

（祖母の救い）

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

私は、認知症で寝たきりの祖母の救いが可能かどうか、を兵藤姉妹に聞きました。姉妹は、家族の救いはお約束だからと答えてくれました。

休みで帰省した時、私は祖母に話しました。祖母と私とどちらが先になるかわからないけど、人は必ず死ぬこと、でも天国があって、そこでは悲しみも苦

しみもないし、祖母が若い頃からしてきたような重労働もしなくてよいことを話しました。それから天国に入りたいかと尋(たず)ねると、「入りたいわ」と答えが返ってきたのです。

信じられませんでした。家族のことさえ理解できているかどうかわからない祖母が、私の問いかけに、はっきりと答えてくれたからです。天国に入れていただくには、自分のわがままをごめんなさいと言えばよいこと、そしてイエス様が、祖母の受けるべき罰を、代わってその身に受けてくださったことを、感謝し祈りました。

私の祈りの途中に、祖母が「そうじゃ。そうじゃ」と合づちを入れてきます。祈り終わった時、これで祖母は天国に入れていただけると安堵感に包まれ、涙があふれました。

神様は、この時、はっきりとした意識の覚醒を祖母に与えてくださって、鈍い私にも、祖母の救いがわかるように、お導きくださったのだと思いました。

(みことばによる答え)

就職は、両親との相談の末、二年の期限付きで東京にさせてもらいました。無味乾燥としたOL生活の中で、礼拝は私にとって安息の場で、この時間がずっと続かないかなあと思いました。こうして一年半が過ぎた頃、そろそろ四国に帰らないかと、母から電話が入りました。

こんなに恵まれた場所に置かれているのに四国に帰ることが本当に御心なのでしょうか。そう思った私は、みことばによって教えてくださるように祈り始めました。

一ヶ月が過ぎた頃、一つのみことばに目が釘付けになりました。

あなたがたはこの山に長くとどまっていた。向きを変えて、出発せよ。(申命記　1・6〜7)

この時、神様は出発することを望んでおられるのだと確信しました。その後を読んで行くと、「見よ。わたしはその地をあなたがたの手に渡している。行け。その地を所有せよ。」(申命記　1・8)とありました。このみことばが与えられた翌年、一九八六年四月に四国の高松で就職させていただきました。

(主のご真実)

私たちは真実でなくても、彼(イエス・キリスト)は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。(2テモテ　2・13)

高松では会社とアパートを往復する日々の中で、私はここで何をしているのだろうと思った時、「主のための放浪者」という本の中で、コーリー・テン・ブームさんが、みことばによって祈っていたことを思い出しました。そして、私も彼女のように祈ってみようとの思いが与えられました。

あなたさまが出発せよとおっしゃったのでここに来ましたが、仕事をするだけで日が過ぎていきます。みことばのお約束はどのようになったのでしょうかという旨の祈りでした。

間もなく同期入社の本川さん(旧姓金山さん)がイエス様を信じる者へと変えられ、豊かな交わりの時が与えられました。また高嶋さんがベックさんのテープを通してイエス様を信じ、姉妹との結婚へと導かれました。それから社長が入院された時、イザヤ書のみことばを持って、お見舞いに行く機会が与えられました。

そして、三十年近くの時を経た二〇一三年、元専務がイエス様を信じる者にされたのです。召された後、

娘さんから届いた葉書に、生前の言葉が書かれていて、「神様ありがとうございました」で終えられていました。

神様はご真実で、みことばのお約束を成してくださるお方と知り、ひれ伏す思いです。

（結婚に至るまでの試練）

神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

話は戻りますが、高松での約三年間の会社勤務の後、徳島の実家で過ごすようになりました。両親が、私の結婚のことを心配して結婚紹介所に登録したので、私は次々にお見合いをすることになりました。たいていは初回で終わりになりました。私がお見合いの席で信仰の話をすることが問題だと気付いた母から、そういう話はしないように口止めをされました。

だんだんお見合いをするのが苦痛になっていきました。そんな中で、母は私を理解しようと、私の話に耳を傾けてくれました。神様の祝福をいただきたいから、みことばに従って未信者の方とは結婚したくない旨をやっとの思いで話すことができました。

今度はクリスチャンを探（さが）してきてくれました。今度こそという思いが両親にあったのだと思います。この話を断ったら勘当だと父から言い渡されました。その方は教会に通っておられ、私が集会に集いたいと言うと、この話は終わりだねと去って行かれました。

それから一ヶ月ほど後、兵藤姉妹から広橋兄弟を紹介され、一九九一年十一月十九日に吉祥寺キリスト集会での結婚式へと導かれました。

（結婚生活における訓練）

教会がキリストに従うように、妻も、すべてのことにおいて、夫に従うべきです。夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。（エペソ　5・24〜25）

ベック兄が、私たちの結婚式で、本当の愛は自分の幸せではなく相手の幸せを願うものであり、結婚生活は自己主張と自己決定から自分を解放するための場、つまり自己否定の訓練の場ではないでしょうかとお話しくださいました。

これまで独りで決めていたことを、主人に尋ね了解を得なければならず、結婚当初から失敗続きでした。結婚して二十四年余り経った今でも、「私は、自己主張と自己決定の連続です」と告白せざるを得ません。

結婚生活を通して、自分の中には、自分を大切にする思いしかない。でも、これほどとは思わなかった自我を明らかにされています。

（横浜から徳島へ）

もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。（マタイ　18・19）

結婚して横浜に住むようになった私たちでしたが、四国に帰って来てほしいという私の母の希望もあったので、御心を求めて二人で祈るようになりました。

横浜での生活が五年ほど続いた頃、主人から会社の経営が苦しくなったので辞めることになったと聞かされました。祈りの答えかもしれないと思い平安でした。

ベックさんに相談し、徳島で主人の仕事が見つかったので、帰ることを決めました。

横浜にいる間、子供連れで、青葉台の祈り会に参加させていただき、子供に祈りと愛情を注いでいただきましたことを心から感謝しています。

（思いがけない試練）

あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。

（1ペテロ　4・12〜13）

徳島に来て、定年までと思っていた会社を主人が辞めることになった時、私は大きなショックを受け、思い煩いました。私もパートに出るようになり、そこに、共に祈れる近藤姉妹が備えられていました。

（神様の御手の中で）

今、徳島で家族と共に、そして吉祥寺から兄弟方を送っていただいて、イエス様をご紹介できるのは大きな喜びです。ふり返ると、神様の御手の中で生かされていることに思いを馳せ感謝でいっぱいになります。

私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。

（使徒　17・28）

広橋真由美（ひろはしまゆみ）
一九六二年　徳島県三好郡生まれ
徳島県立脇町高等学校　玉川大学文学部卒
夫・雄二（ゆうじ）　長男・謙（けん）

主の十字架

後藤　政彦



左が政彦さん、右から2人目が妻の緑さん。ご家族と

私は一九五二年七月生まれで、六十三歳になります。あっと言う間の六十三年でした。ノイローゼになったり、病を与えられたり、問題はたくさんありましたが、振り返ればそれにも増してたくさんの恵みをいただきました。私の歩みは主に守られながらの人生でした。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。

（詩篇　103・1〜2）

私は、両親と姉の四人家族でした。父は一九七五年に天国に帰りましたが、家族に対し厳しい人でした。そのようなこともあり、私は何をするにも、いつも人の顔をうかがいながら行動する人間になっていました。人の目ばかり気にして、人間関係に疲れ、中味は

空っぽでした。人間失格という小説の主人公、葉蔵という男が道化を演じ、それが見抜かれそうになって人を恐れるところを読んだとき、まるで自分のことを言われているような気がしたことがあります。そのような自分に嫌悪しつつも、何をするにも投げやりで「人にバレなければ。うまくごまかせれば」と都合よく生きるようになりました。

あるとき、会社からの帰り、第三京浜高速道路でスピード違反をしてパトカーに捕まりました。そのとき反則切符を切られるのが嫌で「おなかが痛くて、早く家へ帰りたくて飛ばしていたのだ」などと適当な言い訳を作り出し、挙句の果てに警察の車で家まで送ってもらい、家に着いたら怒鳴って警官を追い返しました。

そのときのことは、自分の本性を見るようで思い出したくないのですが、それが私の本当の姿だと思います。その後も同じようなことを何度も何度も繰り返してきました。仕事も適当で刹那的な生き方を続け、人が見ていなければその後ろで舌を出していました。「神様がいたら決して赦されないかもしれない。自分は本当に救いようのない男だ」と思い、自分の薄汚い内面を見て、どんどん解決できない袋小路にはまり込んで行きました。

神よ。あなたは私の愚かしさをご存じです。私の数々の罪過は、あなたに隠されてはいません。

（詩篇　69・5）

私は正月になれば神社に初詣（はつもうで）、葬儀では焼香をして手を合わせるという、日本人のごく一般的な信仰しか持ち合わせていませんでした。それでも、この世界には目に見えない何かが存在しているようには感じていました。それは自分が勝手に考え出した得体の知れないもので、いつも暗い所から私の

内面をじっと見ていて、私を訴え、地獄に落とそうとしているような存在でした。

私は著名作家の本や心理学、ハウツー本、占い本、等を読んだりもしました。しばらくはその気になるのですが、結局何の解決にもなりませんでした。じかも、話題性のあるこれらの本も、いつか店頭から消えてなくなっていきました。実際、今から四十年くらい前にあったこれらの中で、今も残っているものはほとんどないのではないでしょうか。私の生き方は霧の中で地図やコンパスを持たずに山登りをしているようなものでした。

ちょうどその頃、勤めていた会社の近く（神奈川県茅ヶ崎市）に小さな教会があり、そこでアメリカ人宣教師の方から英会話を教えてもらうことになりました。それをきっかけに礼拝にも誘われ、出かけるようになりました。教会は子供の頃に通っていた幼稚園の隣りにあり、何か懐かしい気持ちになりました。

4人の証し

Unser HERR lebt

しばらくして、東京の本社勤務となりましたが、新しい仕事の問題や職場の人間関係で思い悩むようになり、改めて毎週日曜日になると東京から茅ヶ崎へ礼拝に集うようになりました。聖書を持っていなかったので、思いきって買いに行ったとき、分厚くて重い聖書を取って「これは今まで読んでいた本とはまったく違う、神様が書いた本だ。人生を歩くための地図なのだ」との思いから畏怖を感じました。でも、始めは何が書いてあるか分からないところがたくさんあり、途中で嫌になりました。

しかし読み続けるなかで、自分の内にある罪が次第に明らかにされていきました。

私は今まで神様を忘れて的外れな生活をしていたこと。十戒で神様が守るようにとおっしゃっていることの真逆を行っていて、それは自分の努力や修行では解決できないこと。したがって、世のだれ一人として神の前に正しいとされる人はいないこと。自分の中に少

しは良いものがあるのではないかと錯覚していたけれど、良いものは何もないこと。それらすべてが自分の罪であることを教えられました。私は神の前にまったくだめな罪人なのでした。

義人はいない。ひとりもいない。悟りのある人はいない。神を求める人はいない。すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。（ローマ　3・10～12）

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。（ローマ　7・18～19）

「姦淫してはならない。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。（マタイ　5・27～28）

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ　7・24）

けれども主はみことばを通して、いっさいの罪をひとり子であるイエス様に負わせられたことをやさしく語ってくださいました。

しかし、彼（イエス様）は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。（イザヤ　53・5～6）

「どくろ」と呼ばれている所に来ると、そこで彼らは、イエスと犯罪人とを十字架につけた。犯罪人のひとりは右に、ひとりは左に。そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ　23・33～34）

「このみことばの『彼ら』と言うところを自分の名前に置き換えて読んでみなさい」と、ある本に書かれていました。私も自分の名前に置き換えて読んでみました。そのとき、槍を持ち、イエス様を十字架にかけて罵っているのはまさしく自分でした。そのような私にイエス様は「父よ、政彦をお赦しください。彼は今まで何をしていたか分からなかったのです」と、私が生まれる二千年前から、今に至るまで祈り続けていてくださったことを教えられました。私はこのみことばに出会ったとき、私が受けるべきいっさいの罪を、イエス様が十字架上で身代わりとなり、すべて解決してくださったことを確信しました。今でも私は、このみことばに帰ることがあります。それほど私の心に突き刺さってきたみことばでした。

私はそのままで、イエス様のところに行けばよかったのです。「私はわがままで自分中心でした。生ける神を見ないで、人ばかり、自分ばかり見ていました。私はあなたが守れと言う戒めの一つとして守り通せない者です。そしてイエス様が私の負うべき罪を身代わりとなって背負ってくださったことを感謝します」。私は一人で畳に座り、初めてイエス様に祈りました。神様は生きておられ、私の祈りと思いを、今、聴いてくださっている。涙が出てきて、ただうれしかったことを想い出します。

神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。
（詩篇　51・17）

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。
（詩篇　34・18）

それからは熱心に教会に通うようになり、滴礼式の洗礼を受け、しばらくすると伝道委員や新会堂建設委員などの役を任されるようになっていました。後に妻となる緑姉妹と出会い、結婚してからは新居を茅ヶ崎に決め、ますます教会生活が中心となっていきました。トラクト配り、特別伝道集会など、教会員を獲得するためにいろいろなことを考えて行いましたが、決して実りの多いものではなく、これらの行いを主のための働き、と勘違いしていたように思います。

そのようなときに、私の姉の石田幸子姉妹が吉祥寺集会に集うようになり、妻の緑も誘われて集会に行くようになりました。日曜礼拝も別々となり、私と緑との間で一致がなくなり、口論をすることが増えていきました。ときどき緑が集会の話をすると、私は適当に話を聞き流していたのですが、ちょうど御代田でも福音センターの建設をしていて、その経緯を聞くことができました。それは、イエス様が先立って計画を進めてくださり、兄姉は祈りつつ、一切を主に頼っているとのことでした。会堂建設のあり方がまったく違っていて、私も教会も、主の計画を妨げているだけのものであることを教えられました。

人の心には多くの計画がある。しかし主のはかりごとだけが成る。
（箴言　19・21）

教会運営に疑問を持ちながらも、今までのつながりもあり教会に集っていた私でしたが、突然、東京に

母と住んでいた姉家族がニューヨークに転勤することになり、私たちは母と同居するため、茅ヶ崎から引っ越すことになってしまいました。これは、イエス様からの導きであったと思います。東京に戻ってからは、自然に緑と母と三人で吉祥寺の礼拝に集うようになり、私たち夫婦は沖縄の海で洗礼（浸礼）を受けることになりました。

しかし、それからの信仰生活は順風満帆、世はすべて事もなし・・、とはいきませんでした。今から八年前に私は左太ももにしこりができ、何度も検査を受け悪性との診断がでました。病名は軟部肉腫で十万人に一人の確率だそうです。手術を受けることになり、わたしの信仰は大きく揺さぶられました。不安になりイエス様に信頼できなくなり、呟いてばかりいました。自分の信仰は、みごとに困難の前に吹き飛んでいました。手術の前日の夕方、妻の緑も帰って、ひとり病室でぼんやりしていると、集会の岩下兄姉が見舞ってくださり、みことばを届け、お祈りをしてくださいました。皆で祈った後、不思議と平安があたえられ、翌日の手術もあまり動揺することもなく受けることができました。たくさんの兄姉が祈っていてくださったことを後で知り、主にある兄姉のありがたさを感じました。

こんな状態の私をイエス様は咎めもせず、じっと待っていてくださり、「私に頼りなさい」「頼り切りなさい」と言ってくださったと思います。私は「あなたの前に、まったくだめな者でした」「ごめんなさい」と告白せざるを得ませんでした。そんな私をイエス様は「そのようなあなたを愛し、それだから十字架にかかったんだよ」と教えてくださいました。退院してから久し振りに礼拝に集ったとき、イエス様を礼拝し、たくさんの兄姉と祈れることは救われた者の特権であり、恵みであることを示されました。

母は今まで家の宗教である神道を守ってきました

が、恵みにより吉祥寺で洗礼を受けることができました。晩年の母は認知症が進み、一分前のこともすぐ忘れてしまうほどでしたが、起きているとき、寝ているとき、トイレの中でもイエス様に祈り、好きなみことばは空で言えました。性格も角が取られて、子供のようにイエス様に信頼していました。

亡くなる前日は、礼拝に出席し、イエス様をみなで賛美して、帰りに従妹の家に立ちより、大好きな犬と遊びました。翌日の昼食までふだんと同じように過ごし、午後に体調が悪くなりました。夜、近森兄姉が家まで来てくださり、兄弟が母の体を診てから、祈ってくださいました。それから数時間後に、「ありがとう」「もう行かなくっちゃ」と言い、家族に見守られて天国にゴールインしました。

母が天の故郷に帰ってから、私たちは天国がより近い所と感じるようになっています。また緑の両親も、主にある兄弟姉妹となり天国で暮らしています。その後、従妹家族や叔母、親戚、友人が導かれ、主の救いに与かりました。それらは、私たちが計画して何かをしたからではなく、すべて主がなされたことでした。

最後に、私の叔父と叔母のことを書いておきます。叔父は父の弟で「十三」、普段は「十ちゃん」と言われていました。そしてその連れ合いの妻、「さらちゃん」です。二人とも子供の頃の病気で知的障害になって、小学三～四年生くらいの知能しかありませんでした。でも二人は愛し合い、周囲の支えもあり結婚をしました。こんなことは本当に稀なケースだそうです。母と、さらちゃんのお兄さんが二人の生活費を援助していて、毎月夫婦で生活費を受け取りにきて、夕食を食べてから家に帰っていくときの後ろ姿が微笑ましく思い出されます。

十ちゃんは戦争に行き、軍隊で酷（ひど）い目にあい、復員してからは工場でインクまみれになって働いていましたが、周囲からばかにされたりして、ずいぶん辛い目にもあったようです。

そんな十ちゃんが胃がんになってしまいました。それも末期の胃がんで手の施しようもありませんでした。それで夫婦二人を家に呼んで、母と私たち夫婦と五人で暮らすことにしました。病気は進んでいましたが、みなで礼拝に集い、兄姉との交わりがあり、神様に守られた豊かなときを過ごしました。

あるとき十ちゃんが「ベックさん、どうしている?」としきりに聞くので、「会いたいの?」と確認したところ、「会いたい」と言うので、家庭集会でベック兄と十ちゃん、さらちゃんとお交わりのときを持ってもらいました。帰りにベック兄が大きな手を出して握手するときも、うれしそうにニコニコしていました。叔父夫婦はこの世に障害をもって生まれてきて、救いを妨げる不要な知識はありませんでしたから、もう救われていたのだと思います。

あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。

（マタイ　18・3）

病気はさらに酷くなり、家では看病できず、入院しましたが、眼は澄んで、まるで健常者のような顔になっていました。体はつらかったと思いますが、愚痴はこぼしませんでした。入院して数日が過ぎたとき、「雷が鳴っている?鳴っている?」と私たちに何度も聞きました。四月の桜が満開の日で、雷など鳴っているはずはありません。そしてその日の夜に十ちゃんは天国に帰って行きました。その顔は本当に満面の笑みを浮かべていました。イエス様に会って、もう本当に、うれしくてうれしくてしかたない、そんな笑い顔でした。一九九二年四月、今から二十三年前です。

また、私は大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。」

（黙示録　19・6）

このみことばが響いていました。生前、十ちゃんは、オーケストラの音楽放送があると、テレビの前に座り、指揮者になりきって、体をゆすり、タクトを振る真似をよくしていました。今は天国に帰って、本当に御使いや多くの兄弟姉妹の前でタクトを振りながら、イエス様を大喜びで賛美していると思います。

十ちゃんはとくに意識してイエス様を伝えたわけではありませんでした。しかしその死を通して、主が定められた人が導かれました。ヨハネの福音書12章24節にあるように、一粒の麦が落ちて、豊かな実を結んだのです。

連れ合いのさらちゃんは、十ちゃんが天に帰ってから、しばらくして御代田のセンターで洗礼を受け、主にある姉妹となったのです。その後実家に帰りましたが、今は十ちゃんと一緒に天国で暮らしています。

十字架のことばは、滅びに至る人々には愚かであっても、救いを受ける私たちには、神の力です。それは、こう書いてあるからです。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さをむなしくする。」

（1コリント　1・18～19）

事実、この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救おうと定められたのです。（1コリント　1・21）

私は相変わらず自分勝手で、イエス様を悲しませたり、忘れてしまったりの愚かな男です。でも、悔い改めて主に立ちかえり、子供のようにイエス様を見上げ、祈るとき、イエス様はいつも優しく私を赦し受け入れ、変わりなく暖かく見守ってくださいます。

4人の証し

Unser HERR lebt

後藤政彦
一九五二年七月二十日　東京都生まれ
国学院大学卒
富士重工業（株）を経て、現在　世田谷区役所　介護保険認定調査員
妻　後藤緑

イエス様に導かれて

後藤 緑



夫の政彦さんと

私は一九八七年にプロテスタント教会で洗礼を受けました。二十九歳のときです。けれども本当にイエス様と出会ったのは、それから一年が過ぎたころでした。

幼稚園、小、中、高、大学とカトリックの学校で育った私は、宗教的な環境の中「清く、正しく、美しく」生きていくことが理想でした。しかし、外側を一生懸命にそれらしくしたとしても、内側は自己中心的な学生でした。

就職し、二十四歳のとき結婚しましたが、一年後に離婚を言い渡されました。これは思いもよらない出来事でした。順調に幸せになれると思って結婚したのですが。これからどうしたらよいかわかりません。どこでこんなことになってしまったのか。人と人との結びつきはこんなにもはかなく、あてにならないものだったなんて。それからは人生で一番大切なものは何かしらと色々な本を読みあさり、色々と考えるようになりました。

結婚は大切なことですが、一時的な、好きだという感情だけでは長続きするものではありません。お互いが向き合って生活するのでは、行き詰まってしまいます。同じ価値観を持って、同じ方向を向いて歩いてゆくのでなければ。そして結婚相手は神様を畏れている人でなければ信用できないという結論に達しました。しかし、私は結婚に失敗した失格者です。もうそんな機会もないでしょうと思っていました。

そんなふうに悶々と暮らしていましたが、二十八歳のころ、今の主人である政彦さんと会社の仕事を通じて出会いました。感じの良い人でしたので、あるとき聞きました。「神様って信じますか?」すると「神様を信じています。僕はクリスチャンです」との答え。なんてことでしょう。神様を信じている人が目の前に現れました。こんな人と結婚できれば幸せになれるだろうなあ。いいなあ。でも私にはとうてい無理です。失格者ですから。しかし政彦さんは、私が神様に興味を持っていることがわかると、通っている教会に誘ってくれました。通っているうちに牧師さんとの交わりに導かれ、イエス様を信じて洗礼を受けることになりました。

それから結婚へと導かれました。心機一転、よりよき人となって、神様にも人にも認めてもらえるようになりたいと、頑張るクリスチャン生活が始まりました。主人も熱心で、教会の役員をしていましたし、私も伝導委員なるお役についてトラクトを配ったり、特別伝導集会を企画したり、がんばりました。しかし、だれも救われてきません。苦労ばかり多くて実が実りません。

そんな中、主人の姉の石田幸子姉妹が教会を出て、吉祥寺キリスト集会に導かれていき、ベックさんのメッセージやいろいろな方の証しのテープを送ってくれるようになりました。そのころ、吉祥寺キリス

ト集会では毎月のように洗礼式があり、何十人も洗礼を受けるというのを知って、一度行ってみたくなりました。

初めて火曜日の聖書の学びに参加し、なぜか聖歌を歌っているときから涙が出て、その日のベックさんのメッセージは、まるで私だけのためにあるような内容で、イエス様が生きて働かれているのを感じました。

軽井沢のキャンプにも参加しました。そこでの礼拝は、教会での礼拝とは全然違っていました。礼拝の中心が牧師さんのメッセージではなく、イエス様の十字架の贖いに対する感謝だったのです。

その後、通っていた教会を出て、吉祥寺キリスト集会へ集うことを決心しました。ベックさんのテープをたくさん聞く中で、モーセの十戒を紐解（ひもと）いた「聖なる神の戒め」のシリーズを聞いていましたら、離婚した者が再婚するということは神様の律法に反する罪だということがわかりました。これは私にとって大変なショックでした。

晴れてクリスチャンになれて、神様にも人にも認められる、よりよき人になろうと頑張ってきたにもかかわらず、最初から、神様の認めてくださる義人のレベルには、絶対的に到達することができないばかりか、神様の律法によると死に値する罪なのです。それは悲しく残念で、どうしたらよいかわからないくらい落胆して、ベッドの上で泣いていました。

私はかつて律法なしに生きていましたが、戒めが来たときに、罪が生き、私は死にました。それで私には、いのちに導くはずのこの戒めが、かえって死に導くものであることが、わかりました。（ローマ　7・9～10）

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。（ローマ　7・18）

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。（ローマ　7・24）

すると、そのときです！イエス様の十字架が目の前に迫ってきました。「あなたのその罪のためにわたしが十字架にかかったのだよ」、イエス様のやさしい声が聞こえたような気がしました。「そうだったのですね。私のための十字架だったのですね。私が十字架刑にかからなければならなかったのに、イエス様が身代わりになってくださったのですね！」。なんとありがたく、申し訳ないことだったでしょう。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。（ローマ　8・1～2）

それまで漠然と全人類の罪のために死なれたイエス様という感覚でしたのに、イエス様の十字架は、まったく私のためだったと思える瞬間でした。それからは罪の意識から解放されて、感謝しつつ喜びながら、集会に通うことができました。

その後一年ほどして、主人もそれまで通っていた教会を出ることができ、ともに吉祥寺集会に集うようになりました。主人も私も、自分の力で人を説得したり導こうとしても、まったく無駄だということをいろいろな場面で教えていただきました。私たちの肉のうちには、なに一つお役にたつようなものはなく、成長してお役にたつようになるでもありません。イエス

4人の証し

Unser HERR lebt

様だけがみこころを成し遂げてくださるので、自分の力で何かしようとしないように気を付けなければなりません。

あれから三十年近くが経ちました。いろいろな試練や試み、また楽しいこと不思議なことがたくさんありましたが、イエス様はずーっと一緒にいてくださいました。そして次々に主人の母、両親、叔父、叔母、従妹たち、甥っ子が救われ、そのうちの何人かは、平安のうちに天に召されていきました。

私は一人っ子として大切に育てられましたが、私が五十歳を過ぎたころに父から、私が養女であって実の両親と姉が三人もいることを打ち明けられました。これは本当に驚きの出来事でした。そのとき真っ先に感じたことは、今まで本当に愛して育ててくれた両親への感謝の気持ちでした。それと二人とも素直にイエス様を受け入れてくれたことも感謝なことでした。今は天国でイエス様と憩っているので安心です。同時に新たに知った家族の救いのことも祈っていかなければなりません。今はみんなと交流することができるようになり、徐々にイエス様のお話もできるようになりました。私は養女になったからこそ、いろいろなことを経て、イエス様を知る機会に恵まれました。思いがけず家族が増えたことも感謝です。家族の救いはイエス様のお約束ですから楽しみです。

最近、二十六年間一緒に生活してきた主人の母の充子姉妹が、イエス様のもとに召されて行きました。同居したてのときは、私もわがままだったり、価値観も違ったりでなかなか大変でしたが、一緒に生活していく中で充子姉妹はイエス様と出会い、本当にイエス様の通りよき管となって信仰生活を全うされました。召される前日まで集会の日曜礼拝に集い、いとこの脇岡家で犬たちと戯れていました。召される日には、朝食も昼食もおいしく食べていましたのに、午後二時ごろになって急に発作が出たのです。主人に帰ってきてもらい、石田幸子姉妹と甥の石田圭ちゃんにも来てもらいました。夜九時半ごろには近所に住むお医者様の近森兄姉も駆けつけてくださり、みんなでお祈りをして、夜中の十二時ころ召されました。召されるとき、「イエス様がここにいらっしゃる。もう行かなくちゃ。あなたのことは絶対に忘れないから、みんなありがとう」と言って、静かに天に召されていきました。

イエス様は真実なお方で、私たちが召されるときはちゃんと迎えに来てくださるということをはっきりと教えていただきました。このことは充子母が残してくれた大いなる遺産です。今はイエス様とともに天国で先に行った父やみんなと、私たちが行くのを元気に待っていてくれることでしょう。

東北の大震災、地球温暖化やとんでもない事件、人々の中に愛はなくなり、世の中はますます不穏になり、将来になかなか希望が持てない時代です。本当にイエス様のご再臨が待ち遠しいです。その日まで目を覚まして、イエス様に導かれて歩んでいきたいと思います。

後藤　緑
一九五七年生まれ
光塩女子学院、白百合女子大学文学部仏文学科卒業。
富士重工業(株)を経て現在主婦。
夫　後藤政彦

キリスト集会へのご案内

牧師制度がありません

キリスト集会には牧師制度はありません。
いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、
純粋に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするひとびとの集いです。

組織も、会則もありません

キリスト集会には役員会も、総会も、定例会儀も、会則もありません。
みなが助けあって重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもってなされます。

会員制度がありません

会員として登録されるような、いわゆる会員名簿にあたるものはありません。
出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、
主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

献金制度がありません

月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行われ、
無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

日曜礼拝

祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、
パンとぶどう液にあずかります。
あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。
礼拝の後は福音集会で、兄弟によって主のみことばがとりつがれます。

家庭集会

家庭で開かれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、
福音の喜びをつたえる集いです。世界で百カ所以上あり、多くのところで日曜礼拝が行われます。

よろこびの集い

西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国の人々が集まる大きな集会です。
快適で経済的な宿泊施設を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会
東京都武蔵野市吉祥寺本町4−9−11
[電話] 0422-21-8450（集会所）

日曜礼拝・福音集会

	10:00 / 18:30
火曜学び会	11:00
木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00
中高生日曜クラス	9:00



西軽井沢国際福音センター



西軽井沢国際福音センター
[電話] 0267−32−6400
長野県北佐久郡御代田町塩野450−15　〒389−0201

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス
[電話] 0267−32−6444
長野県北佐久郡御代田町塩野450−33　〒389−0201

■しなの鉄道で御代田駅下車。タクシーで約5分（1000円程度）徒歩45分＝3km
御代田へは東京駅より長野新幹線「あさま」にて軽井沢駅下車、しなの鉄道に乗り換えて三つ目の御代田駅下車。
■ 周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

集会の出版物

実を結ぶ命 がんにうち勝ったドイツ少女リンデ



ゴットホルド・ベック編著

二十歳そこそこのドイツ少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇蹟であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」(エレミヤ31・3)リンデの、主に従い通す態度は、キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起こし、多くの人々が自分の支配権をイエス様に明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。なおこの本は韓国語版、ドイツ語版、英語版が出版されました。

なにものも私たちを神の愛から引き離すことはできない (上・下巻)



ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト集会でのベックさんの聖書の学びのうち、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第1章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

絶えず祈れ (上・下巻)



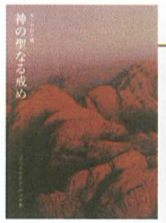
ゴットホルド・ベック著

主は私たちが祈ることを望んでおられます。主なる神は、あふれるばかりの祝福を、私たちに注ごうとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえに注がれる扉を開けるのです。祈りの本当の大切さをよく知ることができれば、まだ救われていない方々はイエス様のみもとに導かれ、また、すでに救われている方々は、いまよりもさらに何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るための励ましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、下巻です。「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎりない可能性」などのメッセージが収められています。

■ キリスト集会の本、雑誌などの注文はハガキで下記迄。電話での注文は、お控えください。

注文先　〒180−0004　東京都武蔵野市吉祥寺本町　4−9−11　吉祥寺キリスト集会

モーセの十戒 神の聖なる戒め



ゴットホルド・ベック著

モーセの十戒は約三千五百年前、主がモーセを通してイスラエルの民に告げられた「十の戒め」です。そこには「聖なる神のみこころ」が現されています。ですから、当時のイスラエル人だけでなく、あらゆる時代の、すべての人間に対する訓戒と言うことができます。そして、この戒めを真剣に受け止めるとき、人間は自分の罪深さを思い知らされ、罪の問題の解決を願ってイエス様による救いに導かれる、という恵みに与ることができます。ところが、この大切な「聖なる戒め」が、今はほとんど無視され、軽んじられています。それは近年の社会秩序の乱れとも無縁ではないでしょう。こういう時代であるからこそ、「十戒のメッセージ」に心の目を向ける必要がある、と思います。キリスト集会の雑誌「主は生きておられる」が創刊号から12回にわたって「モーセの十戒」を連載し、それを単行本にまとめた理由もここにあります。

すぐに起こるはずのこと−ヨハネの黙示録 (第1〜4巻)



ゴットホルド・ベック著

ヨハネの黙示録は、初代教会で何よりも大切にされました。しかし、黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤読も多く、霊的に正しく読み解くことは困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。この本は、吉祥寺キリスト集会の学び会で、約1年半ほどの間に行われたベックさんのメッセージをまとめたもので、第1巻には黙示録の1〜3章、第2巻には4〜7章、第3巻には8〜15章、第4巻には16〜終章までが、それぞれ収められています。

光よあれ −私たちは主のもの



証しシリーズ (第1〜9集)

いかにしてイエス様に出会い、救われたか、またそれによって、人生がどのように変わり、重荷から解放され、よろこびと平安の日々を生きることができるようになったかを、多くの方々が証しされています。第1集から第9集まであり、実に596人の方々がそれぞれの人生と主にあるよろこびを感動的に語っておられます。

主は、生きておられる
Unser HERR lebt

Unser HERR lebt
主は、生きておられる

主は生きておられる　第43号

定価100円（税込み）2017年1月15日初版

編集スタッフ	清水洋一　古田公人　田中順治　福留伸子　石塚稔成　石塚優子 岩本秀造　岩本範子　吉田浩　久田倫子
デザインスタッフ	石黒郁彦
写真	鈴木力　竹原庸光　畠山利広　重枝宏英
題字デザイン	飯守恪太郎
印刷	新生宣教団
発行所	キリスト集会

今回も多くの方々から写真の提供をいただきました。
勝手ながらお名前は省かせて頂きます。
ご協力ありがとうございました。

